

## 新人賞受賞作に見るリアルな感覚

松下 誠一

短歌を作り始めて四年が経った。感じていることを素直に書こうと思う。近年の新人賞受賞作のなかから興味のある歌を引き、感じたことを書いていければと思う。

第四回笹井宏之賞大賞の柗沢知世の連作「ノウゼンカズラ」から二首引く。

ポニーテールをしようと呼びかけて髪が束つか  
んだ子どもの手首くらしいの  
るるるるる雪うさぎつてるるるるる溶けた  
ら赤い目を食べたげる

一首目、「子どもの手首くらしいの」という比喩は生々しさがあって、歌と読者の感覚がリンクするような巧みがある。そして、この比喩を効果的にしているのは「寄せて髪束つかんだ」の部分にあると思う。この部分において助詞は省略されておき、ひとつひとつのパーツが素早く連続した映像を読者に想像させている。その映像の焦点が「寄せて髪束つかんだ」瞬間に合わせられることでより結句の比喩が効いている。

二首目、初句・三句の「るるるるる」が印象的であるが、特に注目したのは結句の「食べたげる」である。「くしてあ

げる」を省略した形になっている。この結句にはどこか力の抜けるようなおかしみがある。「食べてあげる」では定型から外れてしまうため、定型にねじ込んだとも言えるかもしれないが、この歌の魅力的部分はこの省略した「食べたげる」にある。「るるるるる」や「赤い目」の持つ記号的などこか不穏なイメージを結句の脱力感によってバランスをとっているとも言えるかもしれない。

ここで引いた二首では、省略がキーポイントになっていると思う。助詞を省略することで読者の想像する映像に速度感をもたらすことができ、動詞を省略した形にすることで独特のくだけたような脱力感が生まれている。

第五回笹井宏之賞大賞の左沢森の連作「似た気持ち」から二首引く。

ふくよかな朝には窓をうごかして子どもが  
描いた絵も年をとる  
降りだして日傘がそのまま雨傘になってし  
まうその日のそのからだ

一首目、「ふくよかな」はすこし時間的な余裕を感じられる表現で、そういった朝のわずかな時間に「子どもの描いた

絵」の紙の質感や色味に経年劣化を感じている場面かと思う。

二首目、初句「降りだして」によって場面の設定がなされていて「その」の音のリフレインによって韻律をつなげている。下句の「雨傘になってしまうその日のそのからだ」から感じ取れる身体感覚はしっとりとしている。ないはずの記憶が自分のからだを包むような感覚になる文体であると思う。

ここで引いた二首では言葉によって情景が整理されていると感じる。描写ではなく整理。ひとつひとつの動作や出来事があつてそれを言葉によって時系列に整えられていることで、普段の見ている光景との若干のズレが生じていて、そこが歌の面白さになっている。同じく「似た気持ち」から三首引く。

すいこむ息の音ではじまるアルバムを帰る  
までは聴き終わらなかつた

かわいいからとかじゃなく子どもが乗って

きた電車に手を振るのは見てしまふ

今二〇〇六年、茗荷谷に住む 谷だから地

下鉄が地上に出ている

一首目、これだ、と思ひ出すことはむずかしいが、「すいこむ息の音ではじまるアルバム」は想像がつく。体感したことが無いのに想像ができる距離感のモチーフを歌に入れるのが巧いと感じる。

二首目、これは見たことがある光景だ。連作のなかにはつきり光景が浮かぶ歌と、ぼんやりと光景を作っていく歌のバランスが良く、単にわかりやすい連作ということではなく、読み応えのある連作になっている。

三首目、連作の中盤、回想の場面に入っていく歌。書かれている情報は確かなことであり、改まってその発見を書くことによって歌のおかしみを感じ取れる。

ここで引いた三首では、定型をあえて外してまで「ちゃんと言う」というところに面白さのある歌だと感じる。「聴き終わらなかつた」、「かわいいからとかじゃなく」、「谷だから地下鉄が地上に出ている」ということをちゃんと言う。定型から外れると言っても韻律を手放している訳ではなく、「アルバムを」、「乗ってきた」、「茗荷／谷に住む」と、三句目の五音で定型におさまっている。三句目の韻律を核とすることによって、定型から外れていても歌として読むことができる上に、なんてことない情報をちゃんと言うという面白さを両立させていると感じる。

第六十七回短歌研究新人賞の工藤吹の連作「コミカル」から二首引く。

遠泳のような余裕をたずさえてポカリのよ

うなもの 買いに行く

いつも電車で見ている川に沿う道を選びた

い私の遠回り

一首目、「遠泳のような余裕」。遠泳に余裕はあるのだろうか。学校の二十メートルほどのプールですら余裕を持たなかつた僕にはなかなか難しい比喩だ。ただ遠泳をしようと思ひ立つほど水泳に自信がある人にとって遠泳がある程度余裕を持ちながら進んでいく行為であることは想像できる。歌の場合、ある意味で生活に対しての余裕を持てるほどの慣れを感

じると同時に、遠泳という行為の途方もない距離にも考えが向かう。生活に対して余裕とそれを携えたまま進む距離へのふたつの思いが初句の比喩には含まれていると感じる。

二首目、視点は電車の車窓から見えるその「川に沿う道」を電車内から見ている。が、「選びたい私の遠回り」と下句に続くことで、視点はその「川に沿う道」に立つ主体の一人称視点に移り変わる。この視点が歌の途中で変わる、ねじれることよって、本来見渡すことのできなかつた街の光景を見渡したうえで、「川に沿う道」に視点がクローズアップされる。この映像の感覚が気になる歌だった。

引いた二首の歌においては、「ボカリのようなものを買っていく」「遠回り」をする、というひとつの行為があつて、他はその行為の修飾なのだがそれが抜群に巧い。なんてことない行為を言葉と感覚によって飾られていく歌は読んでいて楽しい。同じく「コミカル」から二首引く。

道なりに進めば浄水場があり、あるはずの  
大きな貯水槽

決めたのは公園を帰ること、とても  
良い思いつきだと思ふ

一首目、見えている光景と想像の光景が交差している。「あり」で現在見えている光景のフォーカスをロックして、そこから「あるはずの」と、頭のなかでその道を道なりに進んでいく様子を感じ取れる。

二首目、「とても良い思いつきだと思ふ」の素直さに惹かれた。「公園を通って帰る」というだけのことなのだが、そ

れが一連のある種の軽さを演出していて読んでいて退屈にならないような効果があると感じた。

ここで引いた二首では、読点が加速装置のように機能している。上句を一度受け止めた上で、下句、特に四句目のはじめの方に韻律の速度感を増す効果がある。連作内においてすべての読点が歌の速度の操作のために置かれている訳ではないが、引いた二首のなかではそのような効果を感じることが出来る。

第七回笹井宏之賞大賞のぶくぶくの連作「散歩している」から二首引く。

電柱の上のほうにはいろいろな技術がかな  
り使われている

ものすごく知らないものがありそれが何故  
か楽器であるとわかった

一首目、一読して納得できる。歌として形にするときに付け加えたり、修飾しようとする、いわば作為の部分徹底して避けているように感じる。作為をタネとしたときにそれを読者に気付かせることなくマジックをしなければならぬ。逆を言えば作為を感じさせないという作為をこの歌には感じるわけだが、その部分に嫌味を感じることはなかった。その光景を見ている瞬間の場面の共有が歌と読者でできているためだと思ふ。

二首目、これも一読して納得できる。なにか雑貨屋のようなところで「ものすごく知らないもの」を見かけることはある。そのときに初めて見たのにもかかわらず、形状や佇まい

からこれは「楽器である」と直感的に感じ取っている。この歌は直感的に感じたことを感じた瞬間に頭が把握している情報に限定して歌の言葉にしている。

ここで引いた二首では、情報の解像度を落とすことにより主体がその瞬間に思ったことを読者も追体験させられるような効果がある。たしかに「いろいろな技術がかなり使われている」はずである。解像度を落として、その瞬間に思ったことを素直に書く。ここに現代のリアルな感覚があるのではないかと思う。またこの二首のようなにも起こっていない場面において、なにも起こっていないことを、作為をすこしでも感じ取らせないように書くことにもリアルな感覚がある。第七回笹井宏之賞永井祐賞の布野割歩の連作「常緑」から二首引く。

座らないことも選べる石垣にどちらかを選

んでバスを待つ

避雷針 あの鳥には一瞬も鳥でなかった瞬

間がない

一首目、「座らないことも選べる」という認識の仕方が面白い。この歌のなかでは座ったのか座らなかつたのか明言はされていない。ただ石垣に対して「座らないことも選べる」という認識の仕方をするということは普段からその石垣に座っており、そういった日常のなかの再認識という感じがする。二首目、初句の「避雷針」によって読者の視線は上空のほうへ向けられる。そこでたまたま「鳥」が通りかかったのだろうか。人間が生まれてから死ぬまで人間であるように、鳥

も鳥として生まれ鳥として死ぬはずだ。たしかにその通りなのだが改まって認識しなおすことで歌の面白みを得ていると思う。

ここで引いた二首では、認識が歌のキーポイントになっている。日常のあるポイントから、一首目ではバスを待っている時間、二首目では避雷針を見つけた瞬間がトリガーのようになって、今までの認識を再構築する。その再構築の過程を歌に見ることで一呼吸置いたような抒情が生まれているのではないかと感じる。

終わりに

ここでは五つの連作を読んで、興味のある歌をいくつか引かせてもらった。さまざまな角度から、リアル（だと認識できるような）な感覚があると思った。あくまで引いた歌に偏りがあるため一概には言い切れないけれどそれをこの文章の終わりにまとめる。椋沢知世の「ノウゼンカズラ」からは比喻による身体感覚に、左沢森の「似た気持ち」からは定型から外れても韻律の上で情報をちゃんと書くというところに、主体のリアルな感覚を書くこうとしている部分を感じた。次に工藤吹の「コミカル」からは生活感のある連作からそのとき思ったこと・したことを多く書く部分に、ぶくぶくの「散歩している」からはある場面に主体が感じることの解像度が落とされている部分に、また、布野割歩の「常緑」からは認識の再構築によって、主体にとつての最もあたらしいバージョンのリアルな感覚というものを読み取れる。駆け足になってしまったが以上で評論を終わりとしたい。